第33号

発行日：
2025年12月21日
発行所：
株式会社エヌワイケー
〒154－0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話：
03-3704-8391
FAX：
03-3703-7121
発行人：
横山和俊

ご挨拶

師走の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。日頃は弊社取扱い各紙をご愛読いただき誠にありがとうございます。今年最終の「駒澤書翰」となります。改めて今年一年のご愛顧にスタッフ一同感謝申し上げます。また、８日深夜に発生した青森県沖地震で被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。ここ数年、日本は地震大国であり、地震はいつ発生するのか誰にもわからないという事実をまざまざと見せつけられる出来事が続いています。元日の地震、深夜帯の地震、さぞ大きな恐怖が被災者を襲ったことと思います。想像するだけで胸が痛いです。しかし、いつ発生するかわからない地震におびえて暮らすのも現実的ではありません。最低限の備えだけは怠らず日々を過ごしていくしかないのでしょう。

地震の恐怖もいかほどかと思いますが、今年は他の恐怖も多くの人に襲い掛かりました。今月１２日、日本漢字能力検定協会は２０２５年の世相を１字で表す「今年の漢字」が「熊」に決まったと発表しました。環境省の発表によれば、４～１１月のクマによる人的被害が速報値で２３０人に上ったとのことです。これは記録が残る２００６年度以降、過去最多だった２３年度の２１９人をすでに更新しています。犠牲者の数も１１月２０日時点で過去最多の１３人とのことです。連日、クマの目撃情報や被害情報を見聞きしない日がなかったとさえ思えるくらい、今年はクマの被害が甚大です。捕獲数も同じく年間過去最多だった２３年度の９２７６頭をすでに超え、１０月時点で９８６７頭だそうです。ゆえに今年はクマ関連の記事も多く掲載されました。一つ紹介します。１１月２５日付毎日新聞朝刊コラム「火論」から「クマを撃つ後ろめたさ」です。「火論」は専門編集委員の大治朋子氏が担当するコラムです。以下、コラム要約です。

宮沢賢治の作品に「なめとこ山の熊」という童話がある。なめとこ山は賢治の故郷である岩手県花巻市の実在する山で、マタギ（猟師）の小十郎とクマの物語だ。小十郎は畑を持たない。やむをえず猟師をしている。クマを撃っては「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ」とつぶやく。小十郎は生活に必要な程度しか殺さないし、クマもむやみに小十郎を襲うことはしない。描かれているのは、両者が織りなす共生の物語のようだ。地元の伝承によれば、狩りには危険が伴うことからマタギは山に入る前に「山の神」に祈った。必要以上の狩りはしないという「戒律」を守る。そうやって貴重なクマを子孫に残そうとしてきた。近代医学が普及する前、動物の肉や骨、胆のうなどは病をいやす大事な「薬」だった。東北地方のツキノワグマが絶滅せず生き延びてきた背景には、小十郎にもうかがえる「クマ殺し」への一抹の後ろめたさと、いったん奪った命にも畏敬の念を抱くつつましさがあったように思える。人を襲うクマを殺すことは、現状ではやむをえない。しかし、人とクマの共生の物語は過去の遺物ではないだろう。クマを殺すことへの「後ろめたさ」をわすれることなく、根本的な対策を急ぎたい。

所長の横山です。今年一年、
大変お世話になりました。

所長の近郊散歩

ライターの福光恵さんが、誰もが知る流行語なき時代の新語を採掘し、そこから世の中を知ろうと試みる日経新聞夕刊の人気コラム「令和なコトバ」。１１月１０日付夕刊、その日のお題は「深大寺」。深大寺はコンパクトながら自然が豊かで、参道には古風な茶屋やそば屋が並ぶ東京都調布市の古刹です。集まっているのはZ世代や若者層。なぜ彼らはこの場所に惹かれるのか。コラムでは福光さんが深大寺を実地検証します。深大寺と言えば、１３００年の歴史がある都内で2番目に古いお寺です。ちなみに1番古いお寺は浅草寺だそうです。豊富な湧水を生かした「深大寺そば」や、バラ園や桜が有名な「神代植物公園」など、グルメや観光スポットも充実しています。コラムには登場しませんでしたが、私にとって深大寺といえば、「深大寺そば」のイメージなのです。過去には三鷹市に住んでいたこともあり、深大寺そばはよく食べに行っていました。ただそれは２０代の頃の話なので、かれこれ３０年近く前の記憶です。懐かしむ思いでコラムを読みましたが、そば好きの私としては頭の中が深大寺そばで支配されてしまいました。我慢が出来なくなった数日後、早々に仕事にめどをつけ主任の粟飯原（あいはら）を誘い二人でオートバイに跨り深大寺を目指すことにしました。オートバイで向かえば４０分少々で着く絶妙な距離です。実は昨年夏に購入した大型バイクですが、なかなか乗る機会がなく走行距離も全く伸びていません。そんな私にとっては４０分少々は一番ハードルが低い距離なのです。

特に下調べもせず、つまり思い付きで粟飯原と２台で深大寺を目指します。当日は深大寺の散策もかねていましたのでオートバイが停めやすく、雰囲気が良いおそば屋さんに入りました。確かに、深大寺に近づくと、突然森の中のワインディングロードを走っているのかと錯覚するほど緑が豊かになります。天気は悪くなかったのですが、曇っていて若干肌寒い日でしたが、迷うことなく外のテラス席に座りました。そばといえば、私は迷わず「鴨せいろ」を注文します。鴨せいろこそ、そのお店の個性がはっきりと出るメニューではないかと思っています。鮨で言うところの「こはだ」のようなイメージです、大袈裟ですが（笑）。しかし、数量限定の鴨せいろは売り切れていました。いかにも思い付きで行動した結果らしいな、と思わず苦笑です。しかし、注文した「ごま汁せいろ」が当たりでした。ごま汁とそばの相性が私好みで、鴨せいろ売り切れの失敗を成功に変える一品となりました。帰宅後調べると、現在、深大寺周辺には２０近いおそば屋さんがあるようで、お気に入りのお店を見つけるべき足繁く通いたくなりました。

そばを食べ終えお腹も満ちたところで境内を目指します。過去には何回もそばを食べに来ていましたが、深大寺の境内に入るのは初めてです。なるほど若者に人気のスポットになるのも納得します。参道を歩くと時代劇のワンシーンかと勘違いしてしまいそうな、雰囲気の良いお店が左右に並びます。先ほどそばを食して満腹のはずが、思わず「蕎麦だんご」まで買って食べてしまいました。程よい広さの境内は丘になっており、山門をくぐり本堂にお参りをした後、裏の階段を上り一番の高所へ行きました。そこからは周辺を一望でき、多くの参拝客が深大寺の紅葉を写真に収めていました。都心からもアクセスが良く自然あふれる深大寺周辺は、若者だけでなくおじさん二人も癒してくれました。次回は今回とは違うおそば屋さんにチャレンジし、神代植物公園を訪れようと思います。ちなみに、コラムの書き出しは「もしも小学校時代、がっかり遠足グランプリがあったらトップ5に入ったと思う。水戸黄門が休憩していそうなクラシックな茶屋やそば屋が並ぶ参道や、子供には刺激が足りない植物園などのあるあそこ。」こういう書き出しや表現、とても大好きです。次回の福光さんの「令和なコトバ」も楽しみです。

次回34号は26年1月18日発行予定です